

磚積擁壁復原に向けた磚の検討

—第一次大極殿院の復原研究15—

はじめに 第一次大極殿南方に存在する磚積擁壁は、表面を黒色に仕上げた平面長方形の磚（以下、長方形磚）を2m以上積み上げる。高い壁は大極殿院壇上の大極殿の莊嚴を演出する装置だったのである。擁壁上半部は崩れており、最上面の納まりについては発掘調査でも明らかになっていない。そこで、同地区出土磚を見直し、磚積擁壁の構造について検討する。

第一次大極殿院地区の磚の出土状況 平城宮内出土磚に関しては、渡辺丈彦により法量分析から、各地区の所用磚が区分されている¹⁾。本稿の第一次大極殿院所用磚の判別は、この分析をもとにしている。

磚の出土状況は大きく3つに分けられる。第1に、擁壁として遺存、または磚積擁壁周辺で西宮造営にともなう堆積土や整地土中に埋没した磚で、出土量は一番多い。第2に、恭仁宮遷都時（I-3期）に解体された東西面築地回廊跡に設けられた掘立柱塀の柱礎盤に転用された磚である。第3に、包含層などからの出土で出土量は少ない。

磚の形状 磚は平面形態で長方形と正方形の2種類に区分できる。長方形磚は多数を占め、平均的法量は長辺×短辺×厚=28.7×15.4×8.1cm。磚積擁壁遺存部で出土した磚はこの形状である。

正方形磚は出土量が少ない。破片で出土しても、一定の大きさ以上の資料であれば、詰められた粘土塊の状態から正方形か長方形かを推定できる。破片資料を検討した上でも、正方形磚は少ない。少数例での平均法量は、長辺×短辺×厚=27.2×26.6×8.2cm。長方形磚を2つ並べたよりやや小さい。

両形態は、胎土・焼成・色調が類似していること、特に厚みがほぼ同一であることから、ともに磚積擁壁所用磚と推定される。

側面調整や断面形状にも着目すると、側面が強めにナデられることで断面形がわずかに台形の資料の存在を確認できた。平面の上下で大きさが異なり、大きい面をa面、小さい面をb面と仮称する。

西面回廊部でI-3期掘立柱塀柱穴礎盤転用の正方形磚は焼成前に側面が傾斜するよう加工されており、面の

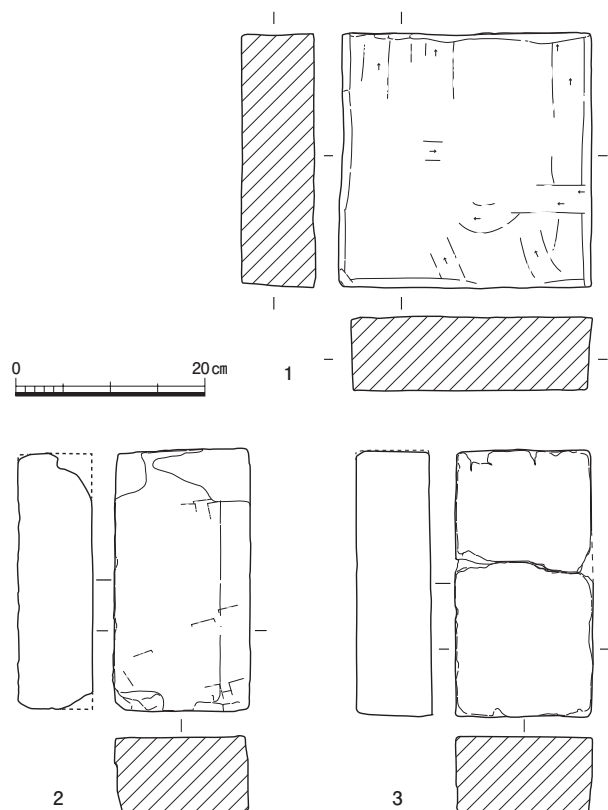
大小差が顕著に観察される（図I-5-1）。

長方形磚には側面が焼成後に表面が剥離し、断面形が台形の資料がある（図I-5-2・3）。破損時に力がかかった方向は様々で、人為的な打ち欠きと推測される。打ち欠きはb面側からa面側に向かって、面の1/2から2/3の範囲にわたり施される。同様の痕跡が、一部の長方形磚の長辺側面でも確認される。

以上をふまえ、磚の断面形状で分類をおこなった（図I-6）。平面に対して側面が垂直の資料を「長（方形）」、やや傾斜して台形状を呈する資料を「台（形）」とする。焼成後の加工は「長」に含まれ、打ち欠きの位置からa～cに細分した。断面形は使用方法を考慮した結果と想定し、分類においては製作時の形状を重視した。

磚積擁壁付近の方形土坑出土長方形磚では、長辺側面の両面に打ち欠きが認められる長-b類と、片面のみの長-c類がある（図I-5-2・3）。長方形磚では、小口面には打ち欠きが認められない。同様の痕跡が認められる長方形磚は恭仁宮でも出土することから²⁾、確実に一定量存在したと推測される。

図I-6の分類をもとに、平面形状とあわせて出土磚の



図I-5 第一次大極殿院地区出土磚

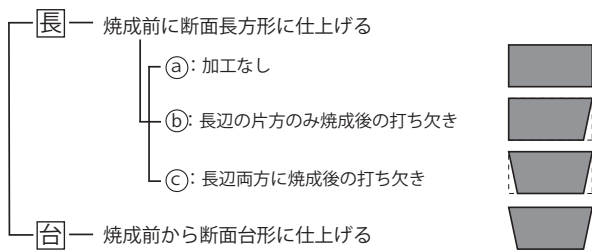


図 I-6 断面形態による磚の分類

断面形での分類 \ 平面形での分類	正方形磚 (渡辺分類 A 類)	長方形磚 (渡辺分類 C 類)
台	2 / 8 点 = 25.0%	83 / 92 点 = 90.2%
長	—	1 / 92 点 = 1.1%
長	1 / 8 点 = 12.5%	6 / 92 点 = 6.5%
台	5 / 8 点 = 62.5%	2 / 92 点 = 2.2%

—: 存在する可能性があるが、現状では未確認

図 I-7 断面形ごとの出土割合

傾向を整理した(図 I-7)。正方形磚では断面台形の資料が多く、長方形磚では断面長方形の資料が多数を占める。**断面を台形にする理由** 断面を台形に加工する例は凝灰岩製敷磚にも認められ、敷いた時に目地をきれいに通すための、いわゆるニゲ加工と推定される。前期難波宮東方官衙の敷磚側面でも先述の資料と同様の打ち欠き痕跡が確認される³⁾。以上から、第一次大極殿院出土の断面台形の磚は、敷磚、つまり磚積擁壁の最上段に敷かれた磚と考えられる。磚積擁壁は裏込めが薄く、正方形磚を積磚とするには奥行が短いため、最上段の納めに使用された可能性が高い。また、長-c類は長側面が打ち欠かれ、長側面を前面に出す長手積の擁壁壁面所用とは考えにくい。

第一次大極殿院磚積擁壁の復原 以上の成果は磚積擁壁復原にどのように生かせるのか。まず、勾配約70°の擁壁面は長方形磚で長手積により積み上げ、正方形磚で最上段を納める。この最上段は一部に長-c類などの長方形磚も使われた。もともとは積磚を目的として生産されたであろう長-a類の磚が、施工時等に微調整がおこなわれたのだろう。小口面に加工が認められず、小口を前面に、正方形磚と奥行をあわせたと考えられる。

大極殿周辺では同時期の礫敷整地面が認められ、磚積擁壁上段全面が敷磚ではない。しかし、縁辺部一列を磚

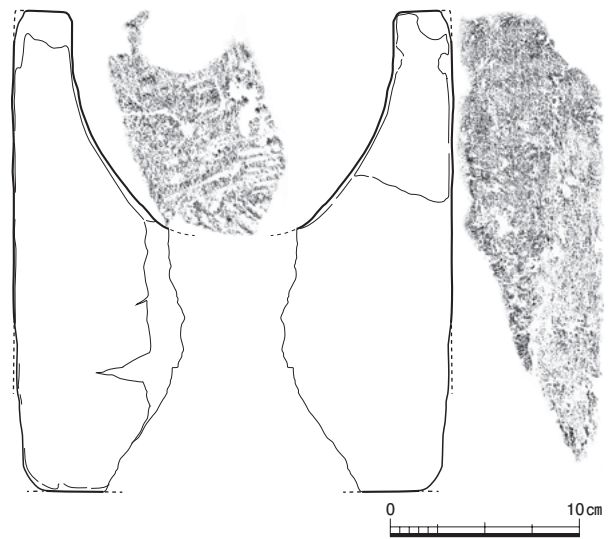


図 I-8 円弧状に打ち欠かれた磚

敷にするか、複数列並べるのか判断が難しい⁴⁾。

参考となる資料が、東面回廊東側で出土した、焼成後に円弧状に打ち割られた磚である(図 I-8)。胎土や調整痕跡は磚積擁壁所用磚と共通する。残存法量と破面で観察される粘土塊を詰め込んだ状態から、正方形磚を加工したと思われる。側面に先述したニゲ加工の打ち欠きも認められる。弧状の加工部分から推測すると、直径20 cm前後の円弧の一部となる。柱など何らかの構造物に取り付け敷磚として加工されたようだ。東面回廊の解体にともない廃棄された瓦とともに出土しており、この磚に関して後世の再利用は考え難く、円弧の打ち欠きも第一次大極殿院地区第 I 期の所産であろう。

この単独資料を根拠とするのは性急であるが、磚積擁壁にともなう磚であるならば、擁壁縁辺部にこれほどの直径の構造物を建てたとは考えにくく、磚積擁壁上面は複数列の敷磚と考えることもできる。出土磚の検討からは、以上のような磚積擁壁の復原が想定される。

(中川二美)

註

- 1) 渡辺丈彦「平城宮出土の磚」『紀要2004』。
- 2) 恭仁宮大極殿基壇裾出土磚に認められる。恭仁宮出土磚は、法量から渡辺が既に平城宮第一次大極殿院磚積擁壁所用磚が移動したと指摘している。筆者も胎土、色調、表面調整などから同様の意見である。
- 3) 平城京左京五条一坊十六坪出土の文様磚の側面も文様面から反対側にむかって傾斜するよう、焼成前に加工されている。
- 4) 三角形の磚は第一次大極殿院では確認しておらず、四半敷きの可能性は低い。

参考文献

奈文研『平城報告XVII』2011。